



クの八重が咲いたので、切花を当時の青山市場に私がオート三輪で50本出したら平均80円で仕切られた。私の月給が5000円くらいの時代のことである。この事実から私は花きの実践教育に切り替えた。温室や畑で生徒が実習して生産した花を生産者と同じ花き市場に出荷していくらに売れたかまでみる。安かったら栽培のどこが悪いのか、切り前か、結束の方法か調べて改善するという実践教育だ。出荷もつねに私がオート三輪を運転し、同乗する当番生徒は市場で取引も勉強するという今の管理教育では考えられない実習であった。

実践教育も知識や技術の基礎がなければならない。わが国の花きは遅れていて、雑誌はもちろん、園芸学会でも花きに関する発表は乏しく、当時は米国の園芸学会誌「Proc. Amer. Soc. Hort. Sci.」しかなかった。しかしこれを読ませてもらうのが大変だった。千葉農専にはなく、もっている教授は藤井先生だけであった。おそろおそろ見せて頂けないかと申し出たら、渋い顔で家まで来て読むならいいいと許可してくれた。日曜にアルバイトの生徒を連れて先生宅に何うと先生は別人のように対応してくれて、小鳥かごが天井まで積まれた部屋で、当時はコピーなどないからザラ紙に書き写す作業を夕方までしたものである。藤井先生宅には数回通い、ここにはないバックナンバーは教育大(駒場)の岡田先生の教室、遠くは農林省の興津支場まで行ったものである。この殴り書きの英文を下宿先で翻訳するのも苦労があった。

### 花き農家を指導する仕事をしたい

都立農芸で10年たって、私の花き実践教育はもっと花き生産者を指導する業務につきたいという意欲に駆られた。たまたま静岡県花卉連会長で後に知事になった山本敬三郎氏の誘いで、静岡県有用植物園に転職した。県が南伊豆の花き振興のための予算をとり、花研究や農家指導をする担当であったが、植物園業務、花き研究、農家指導など、僻地農業での経験は紙面の都合で割愛する。

### 実践的な花き研究への挑戦

伊豆で私なりに3年間頑張っているとき、東京オリンピックに使う花のため、都が花壇苗生産と新農家育成のための研究員枠が一人取れたからこないかと東京農試から誘いがきた。都立農芸の卒業生も運動してくれて私も悩んだ末に返ることにした。しかし東京農試で待っていた仕事は、研究ではなく、カンナの球根を

20万球増殖するというものであった。この元球を農家に渡し400万球にしてオリンピックに使うが、農試での増殖業務は重労働の連続だった。

本来の花壇用花きの研究に戻れたのはオリンピック後であった。やがて私は花壇苗と鉢物を担当し、教育同様の実践研究にシフトしていった。農家がうまくできない技術を追求開発して、それを実践し、実際に市場に出荷し生産者と競い実証するものであった。シクラメンをはじめ、当時まだ農家で良品生産できなかったポインセチア、ハイドラングシアの研究では、技術を組み立てて試験生産した鉢を実際に青山市場に出荷して生産者の数倍の価格で取引された。この市場での実績はたちまち生産者に広がりレベルアップした。東京農試の研究活動は23年間に及んだがここでは省略する。当時の成果は、著述した「鉢花のプログラム生産(1),(2)」にまとめてある。

### 新時代の花き園芸への開眼

東京農試卒業直前、(株)ミヨシの創設者で先輩でもある三好劔男氏が八ヶ岳農場長としてこないかと、親友魚躬君を介してこられ、花きの種苗業界にも関心があったので退職直前に転進した。ここでの10年はまた貴重な体験となった。農場での育種現場の厳しさ、また、苗生産のカーネーション・ファクトリーの建設、第3農場(現在の営業育苗センター)の建設を任せられ、土地買収から設計企画、建設対応など貴重な経験を得た。世紀社長になって常務昇格後は海外業務にも参画し、世界の種苗業界にも目を広げることができた。5年の技術顧問の時代を加え、15年間は多くの知見を得て高齢現役の自負を守れ、社長はじめ関係者に感謝したい。

私は今も花き園芸界に新しい高齢の世界を開拓しようと試みている。定年退職、老後、悠々自適は好きではない。一生現役の証に「農耕と園芸」誌に連載して辛口批評で7年86回を迎えている(自画自賛)。

テクノ・ホルティ園芸専門学校での講義も若い学生に負けまいと、常に新しい分野の講義を構築している。新しい花文化(西洋・日本編)の講義を編集作成している。本年から講義もパワーポイントによる映像と口述による授業体系を実験開発中である。その他、これほど発展した花壇というカテゴリーがいまだに園芸にも、造園にも中途半端に関わって、学問的にも技術にも体系化されていない。これに対する挑戦も今、農業および園芸誌で2年間にわたり連載中である。ぜひご批判いただきたいものである。